

八王子千人同心日光往還ウオークガイド

第21回祥雲寺前バス停（宿中バス停）から茂林寺前駅（計画）

集合 東武伊勢崎線羽生駅改札口 9時10分

歩行距離 約11km。

### 第21回上新郷交差点から茂林寺駅

実施日 2023（令和5）年3月15日（水）天候 快晴 無風。気温高く4月の陽気

参加者 折本 文雄、前北 勝司、中田 信義、中島 征雄 計4名

コース 東武伊勢崎線羽生駅9：10集合・タクシー9：15＝9：24上新郷交差点（9：26）～本陣須永家〔本陣門・従是西忍領石標〕（9：35～9：39）～愛宕神社（9：44～47）～勘兵衛松並木跡（9：50）～賽神社跡（9：58）～石仏～県道7号線工事中迂回（10：01）～道の駅〔川俣切跡石碑・メ切神社石碑〕（10：14～34）～利根川昭和橋南詰（10：35）～埼玉県・群馬県県境（10：42）～昭和橋北詰（10：46）～川俣宿旧本陣塩谷家（10：51）～真如院（10：54）～栗島神社（10：57～11：00）～川俣事件記念碑（11：05～09）～東光寺（11：24）～長良神社（11：28）～阿弥陀三尊板碑標柱・三尊板碑811：32～36）～石仏群・地藏堂（11：38）～長良神社・根本山神社（11：39～41）～富士山供養塔（11：44）～昼食・山田うどん（11：49～12：23）～谷田川・旧青柳橋跡（12：33）～庚申塔（12：42）～龍積寺・麻疹地藏（12：45～51）～青柳城跡～茂林寺入口交差点（13：02）～東武伊勢崎線踏切（13：16）～天満宮～馬頭観音～根本山神社（13：21）～茂林寺・茂林寺沼及び低地湿原（13：26～13：49）～（13：57）茂林寺前駅14：00＝久喜

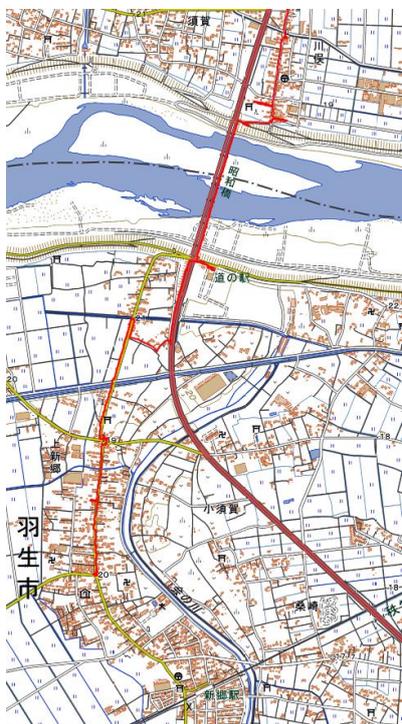
写真は 2020（令和2）年10月26日・29日と本日のものを使用。

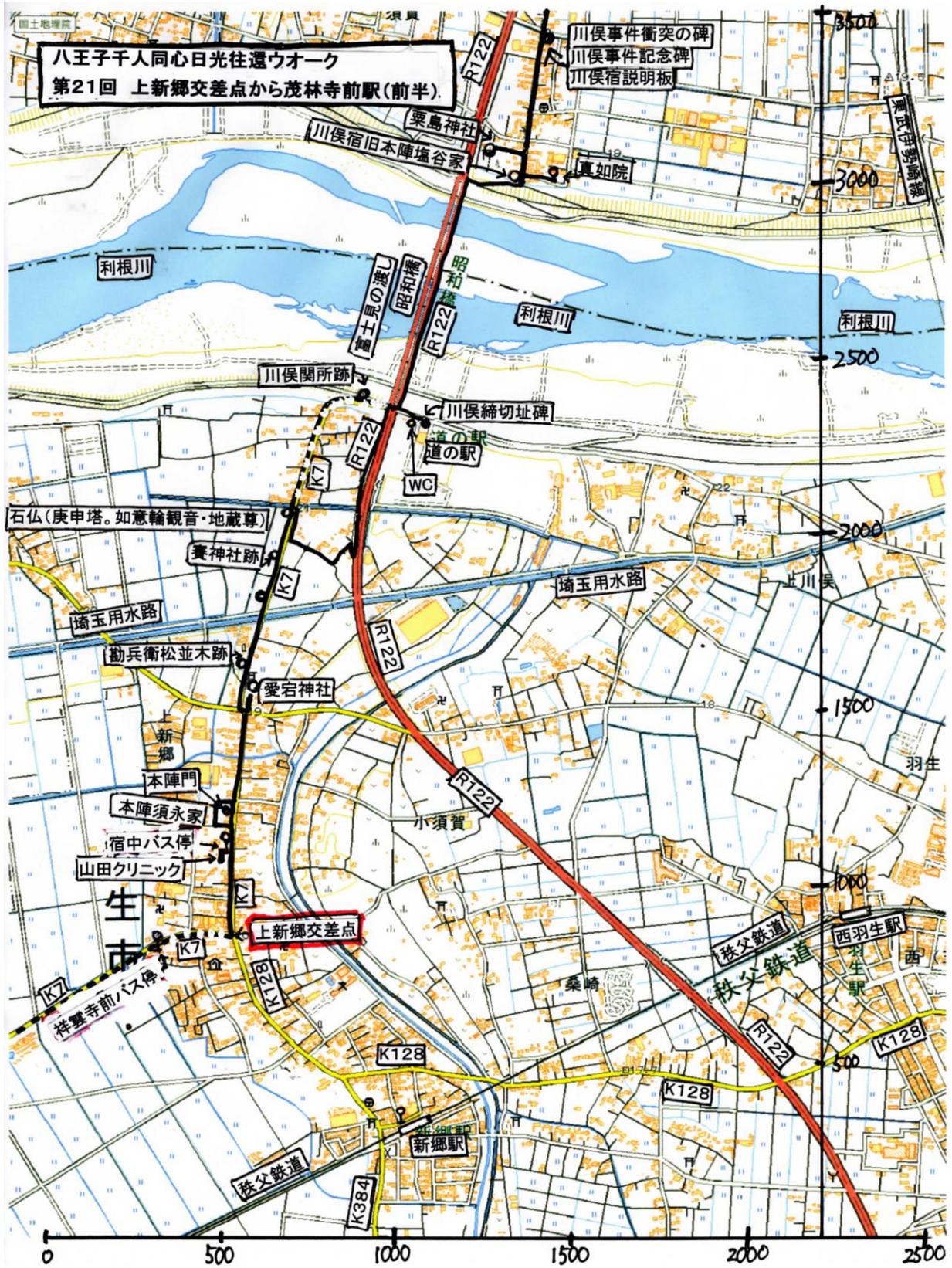
GPS

歩行距離：11.5km。 累計歩行距離 195.1km。

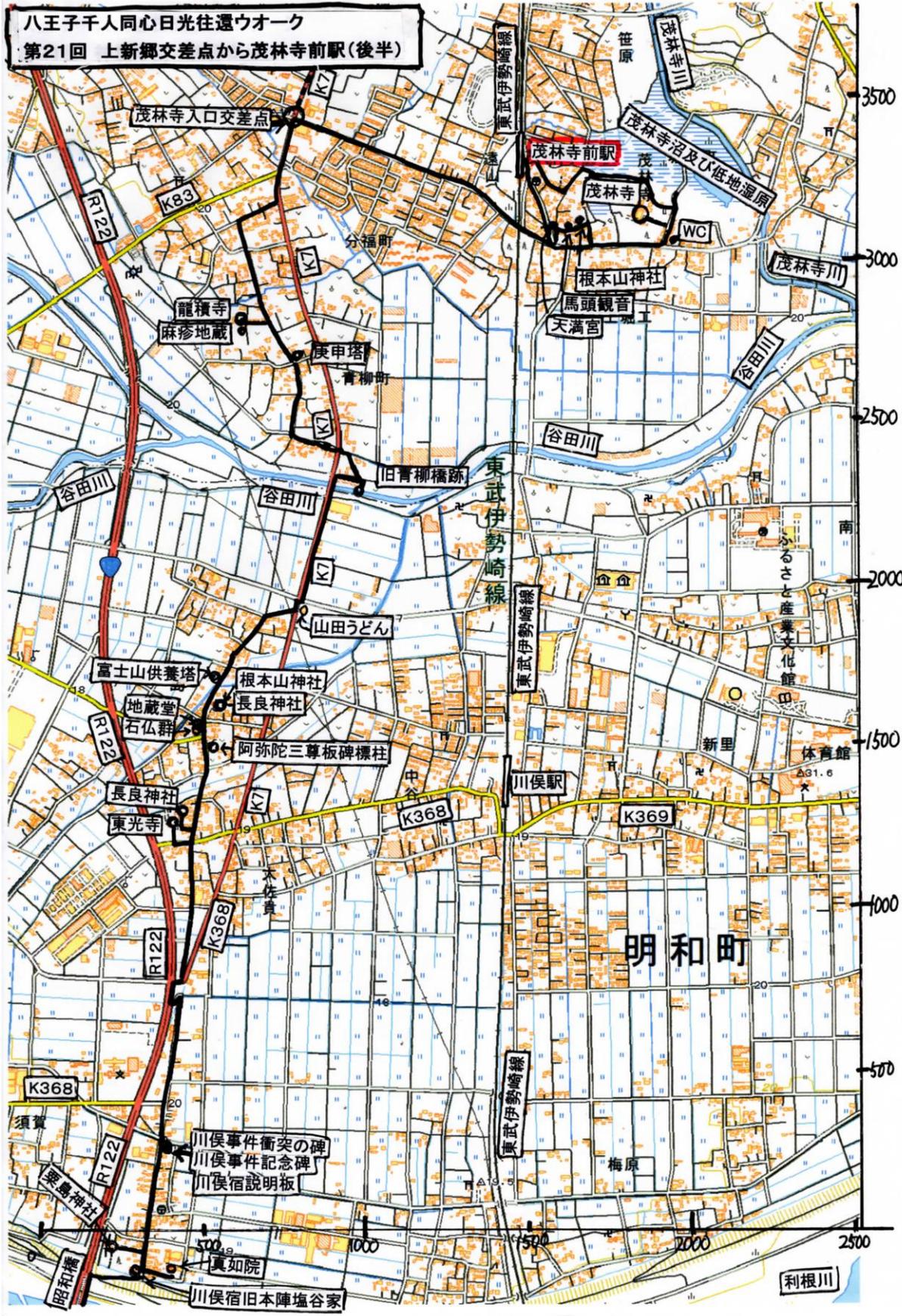
全体所要時間：4時間31分。移動時間：3時間08分。停止時間：1時間23分。

移動平均速度：3.7km/h。全体平均速度：2.56km/h。





八王子千人同心日光往還ウォーク  
 第21回 上新郷交差点から茂林寺前駅(後半)



東武鉄道羽生駅改札口に9時10分に全員集合。9時24分発の羽生市福祉バスで祥雲寺前バス停に行く予定を、バスが来るまでまだ大分時間があったので、タクシーで上新郷交差点までいくことにした。



[羽生駅西口]

上新郷交差点に9時24分に着いた。交差点の傍の南陽醸造の売店前に大勢が行列していた。日本酒「花陽浴（はなあび）」を買い求める人々か。9時26分新郷宿を歩き始める。上新郷交差点、ここから新郷宿となる。県道7号線を北上、山田クリニックの70m程先に左への路地があり（この小路の手前に脇本陣須永家があった）、その先の左手の奥に門が見え、一角が塀で囲まれている。ここが新郷宿の本陣須永家である。（9：35～39）



[本陣須永家門]



[須永家中庭]

新郷宿は昔からの定めで、江戸方面から館林の方へ継ぎ立てる時は行田（忍）から当村へ継がず、直ちに利根川を渡り対岸の川俣宿へ送り、館林から来る時は川俣宿を継がず、当宿へ継ぐという片継場であった。千人同心もこの例にもれず、往きはここを通り過ぎ、帰りはここで宿継をした。

須永家は忍藩主の命で本陣を務めていた。本陣の建物は既に無い。中は庭跡のようで、本陣家の所蔵

品（指定文化財）の説明板と同じく指定文化財の「上新郷のシイノキ」の説明板、「従是西忍領」の石標がある。



[新郷宿・従是西忍領石柱]



[熊谷石原・従是南忍領石柱]



### 従是西忍領の石標

忍藩は他藩との境界を明らかにし、他藩との境界争いを防ぐため16ヶ所に標柱を立てたものの一つ。初め木材であったが安永九年（1780）に石碑となった。《熊谷には『従是南忍領』の石標がある。熊谷のものは、高さ190cm、幅30cm。上右の写真は、2014（平成26）年1月6日に中山道を歩いている時に撮影》

本陣跡から北上し250m程の交差点の先に「愛宕神社」がある。（9：44～47）この交差点は宿の入口で鍵の手になっている。



### 愛宕神社

御祭神は、火之迦具土神。社殿は小高い塚の上に建てられている。この小高い塚は「愛宕神社古墳」と呼ばれる円墳（径15m、高さ2m）である。当社は上新郷地域の総鎮守で、境内には合祀されたい

くつかの小さな社が並んでいる。



[愛宕神社古墳を西側から]



[勘兵衛松並木]



[勘兵衛松石碑]

交差点の先左側に「勘兵衛松並木」があり、松並木の途中に『勘兵衛松』の石碑と説明板がある。

(9 : 50)

**勘兵衛マツ** 埼玉県指定天然記念物 (記念物 天然記念物 大正15年2月19日)

江戸時代、上新郷には八王子宿から日光へ至る日光脇往還と呼ばれる街道が通り、本陣や脇本陣が設けられました。また、街道沿いでは、「新市」が立ち、5と10の付く日には市が開かれていました。

(「家忠日記」「新編武蔵風土記」)

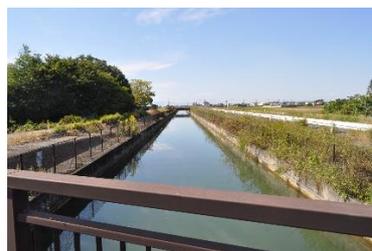
上新郷の日光脇往還沿いに松が植えられたのは、寛永5年(1628)と伝えられています。この年の4月、江戸幕府第3代将軍の徳川家光が日光東照宮を参拝しており、景観を整えるためか、当時の上新郷村を治めていた忍城主が家臣の勘兵衛に松の植樹を命じたと言われています。そのためこの松並木は「勘兵衛マツ」と呼ばれるようになりました。

江戸時代には100本以上を数えたという勘兵衛マツは、明治8年(1875)の調査では69本になりました(新井家文書)。その後、台風による倒木などにより数を減らし、昭和56年(1981)の調査では9本が確認されましたが、平成30年(2018)3月現在、江戸時代から現存する勘兵衛マツは黒松一本のみです。

樹高 約11.7m。 幹周り 約2.4m。  
 平成30年3月26日 埼玉県教育委員会 羽生市教育委員会



[歩道の松並木タイル絵]



[埼玉用水路]

埼玉用水路を並木橋で渡った先に明治時代の俳人「川島奇北の句碑」がある。



『二歳駒 買はれて来り 春渡船 奇北』

その先、松並木が終わった辺りに「賽神社跡」の説明板がある。(9:58)



**賽神社跡**

当地には、万延元年（1860）12月建立の賽神社の石祠があった。

この道は、「日光脇往還」という名の街道で、利根川との渡河点には新郷川俣関所が設けられており、江戸を守る関所の一つで、かつては容易に通行することはできなかった。不幸にも掟を犯した者は処刑されてこの地に晒されたと伝えられている。その弔いのため、ゆかりの地に建てられたものであろう。現在は愛宕神社に合祀されている。

賽神社は、サエノカミという民間信仰の神を祀っている。「さえ」は遮るという意味で、通行人や村人を災難から守るために村境や辻などに地藏菩薩信仰と結びつき同一視もされている。路傍にあるゆえである。

平成22年11月25日

知っている会

新郷13区(別所)

羽生市教育委員会

その先の左の祠の中に「庚申塔・如意輪観音・地藏尊」の三体が祀られている。



10:01, その先、県道は利根川の土手にぶつかり右カーブして昭和橋に繋がるのだが、道路工事のため通行出来ず、戻って迂回して並走している国道122号線に出て昭和橋南詰に出る。遠望すると、かつて県道がカーブして利根川堤防上にあった「史跡 川俣関所跡」の石碑と説明板が道路工事のためか無くなっていた。街道歩きの人間にとっては全く残念なこと。悔しくて悔しくて。

今日は見るができなかった「史跡 川俣関所跡」の石碑と説明板について下見時に撮った写真と説明板の内容を載せます。



### 旧跡 川俣関所跡

川俣関所は慶長年間(1596~1615)に設けられ、明治二年(1869)に廃止されるまでの約二百六十年間続いた。

この関所は江戸城警備のため設けられ、一般に「出女に入鉄砲」といわれるが、江戸に人質になっている諸大名の夫人の脱出を防ぎ、また江戸の安全をはかるため鉄砲のはいるのを厳しく取りしまった。

日の出に開門、日の入りに閉門し、夜中は一般人の通行を禁じた。

関所は利根川沿岸に設けられたものであるが、河川改修のため今ではその跡は川底になってしまった。

関所跡は、はじめ史跡として県の指定をうけその後昭和三十二年の改修工事により現在の地に碑が移され、昭和三十六年九月一日旧跡と指定変更された。

昭和三十六年九月一日

羽生市教育委員会



### 定（さだめ）

- 一、此関所を通る輩この番所の前にて笠やから  
頭巾をぬぐべき事ずきん
- 一、乗物にて通る面々は  
乗物の戸をひらくべし  
但、女乗物は番の輩の差図にて女に見せただし  
可通之事とおるべきこと
- 一、公家・門跡衆・諸大名くげもんげさしゅう  
参向の節は前かどよりさんこう  
其沙汰可有之間 不及改之そのき たあるべきあいだ これをあらためるにおよぼず  
自然不審の儀 あらば可為各別事しぜんふしんぎ かくべつたるべきこと
- 右 可相守此旨也このむねあいまるべきものなり  
仍 執達如件よって しつたつくだんのごとし  
貞享三年四月じょうきょう

奉行



昭和橋南詰の交差点で国道122号線を東南側に渡ると「道の駅はにゅう」がある。場内にはトイレ・ベンチがあるので休憩する。(10:14~34) また、北東側に「川俣締切跡」石碑・説明板と「杣切神社」石碑がある。『あゝ上野駅』を作词した羽生出身関口先生の顕彰碑があったが撤去されたのか確認できない。



### 川俣締切跡 (説明板より)

県指定旧跡 川俣締切跡 (昭和38年8月27日)

川俣締切跡は、それまで分流していた利根川流路のうち会の川筋を文禄3年(1594)に締め切った跡である。

近世以前の利根川は、武蔵・下総両国の国境を南にながれ、現在の東京湾に注いでいた。千葉・茨城両県境を東流し、千葉県銚子市から太平洋に注ぐ現在の流路は、利根川東遷事業と呼ばれる近世前期の大規模な流路変更と河川改修によって付け替えられたものである。この東遷事業は、水害から江戸の防備、関東平野の開発、物資輸送のための船運水路の整備などを目的としたといわれ、徳川氏の江戸幕府によって、半世紀以上にわたって段階的に行なわれた。羽生領新郷川俣付近における会の川筋の締切は、江戸開府前に行われ、その工事であった。

当時、利根川の流れは幾筋にも分流しており、新郷川俣付近においては、現在の加須市志多見、加須

を経て川口へ向かう会の川筋と、現在の河道を東流する一流に分かれていた。文禄元年（1592）忍城主となった松平定吉の命を受け、付家老の小笠原三郎左衛門吉次が指揮して、新郷に堤を築いて会の川筋を締切り、同三年に利根川本流を東流させたと伝えられている。この工事は困難をきわめ、僧侶が人身御供として入水したという伝説も残されている。この締切工事により、会の川や古利根川が利根川から切り離され、以後、江戸や流域の治水がはかれるとともに、利根川流域の広大な新田開発が進められていった。

（石碑には史跡とあるが、場所の移動に伴い旧跡に指定替えとなった）

平成十六年四月一日

羽生市教育委員会 埼玉県教育委員会

### 会の川と旧利根川

会の川（あいのかわ）は、埼玉県羽生市・加須市を流れる河川。近世以前の利根川は、関東平野に入ると八百八筋と呼ばれる程、派川が多く乱流していたようだ。江戸開府の頃の利根川の主流は二つであったようで、その一つがここ昭和橋南詰あたりで利根川から南に離れ下る「会の川」筋と言われる。「会の川」は、羽生領上川俣（現在の国道122号線に架かる昭和橋南詰）で利根川から南に分かれ、行田市と羽生市の境界線を走り、羽生市砂山あたりで東に流れを変え、加須市南篠崎と大利根町大桑の境界で後の葛西用水筋あたりに下り加須市川口に至る。

そこで流れは南下と東方の二つに分かれ、一つは葛西用水筋から大落古利根川を下り松伏町しも赤岩で現在の中川と合わさり、中川を下り葛飾区亀有で古隅田川を流れ隅田川に注ぐ。

もう一つの流れは、そのまま東に進み島川筋、権現堂かわ、庄内古川と進み、松伏町金杉で現在の江戸川に合流する。（こちらの川筋を利根川の本流とする説が多い）

「会の川」とともに旧利根川のもう一つの主流であったのが「浅間川筋」。川俣で「会の川」を分けた利根川は東に流れ、加須市佐波と対岸の加須市下川辺町をつなぐ埼玉大橋の少し上流から下ったようである。この流路が浅間川筋である。その浅間川は加須市川口で会の川と合わさり、上記南流・東流の二つの流れに分かれ東京湾に下ったようだ。



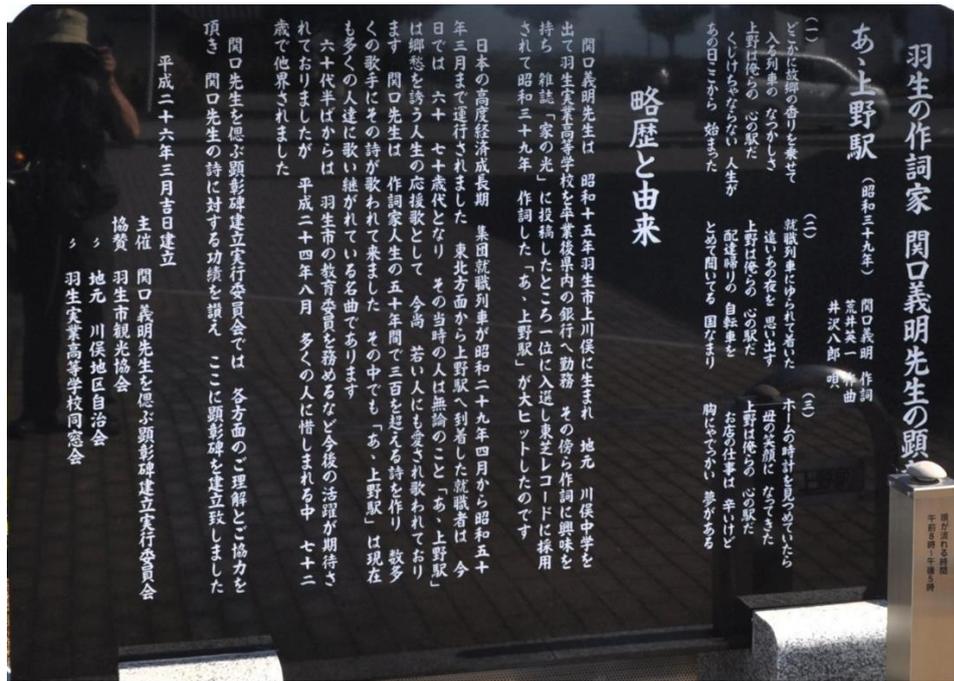
切神社の碑



この碑は明治28年3月15日に改めて建ったのである。その当時は南方用水取入口の堤上にあっただが、げんざいの地点はそこから約百米西である。文禄3年会ノ川を締め切った時の人柱須賀住人の霊を祀った二間四面の祠が、そこにあっただということだが、風雨に崩壊してあとかたもない。この碑の

傍らに会の川締切の跡を記念して石標をたてた。

今回確認できなかった羽生の作詞家 関口義明先生の顕彰碑 (『あゝ上野駅』を作詞)



[昭和橋南詰 (10 : 35)]



[埼玉県・群馬県県境 (10 : 42)]



[昭和橋北詰 (10 : 46)]

利根川に架かる昭和橋を右側の歩道を10分以上かかって渡り、堤防上を右折し斜め左に下る。  
ここには、利根川河口から150.5kmの表示があった。



[川俣流量観測所標柱]

[川俣宿への下り]

堤防下で道は左に曲がる。曲がり角左に白塀の屋敷がある。この屋敷が川俣宿本陣塩谷家である。  
(10:51) 本陣建物は無くなっているが、白塀と屋敷門が当時の様子をうかがわせる。



「川俣宿入口」

[本陣塩谷家屋敷門]

旧本陣の前を右に70mほど入った左に「真如院」がある。(10:54) このお寺は、明治33年(1900)2月に起きた川俣事件で捕縛された被害民が連行された場所。また負傷した農民を介護した所。



[真如院]

街道に戻り、すぐ先左側の鳥居があり、細い参道の奥に「栗島神社」がある。(10:57~11:00) 境内にある子沢山の狛犬がいい。



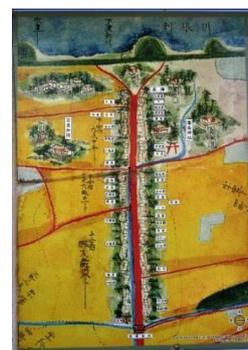
[栗島神社]

栗島神社から350m弱の右側に小さな公園があり、「川俣宿表示 常夜燈」「富士見の渡しと日光脇往還 川俣宿の歴史」解説板と「川俣事件記念碑」「川俣事件衝突の地」石柱・解説石板がある。

(11:05~09)



川俣宿



### 富士見の渡しと日光脇往還 川俣宿の歴史

川俣集落は、旧日光脇往還（現在の旧122号線）を挟んで、両側に家並みが密集して形成されているが、これは江戸時代に宿場（旅人の宿泊設備、荷物運搬に要する人馬などを継ぎ立てる設備のある場所）であった名残である。江戸時代には、利根川沿いに渡船場も船着場も存在し、日光脇往還の重要な宿駅としてのみならず、利根川の渡津、利根川水運の河岸としても栄えた。

日光脇往還は、往古より奥州への行路として利用されていたが、日光廟の建立に伴い江戸～日光の参詣道としても利用され「日光脇往還」と呼称されるようになった。この道路は、江戸日本橋～鴻巣までは中山道と重なり、鴻巣より行田（忍）—新郷—川俣—館林の4宿を経由し佐野（天明）に至り、佐野～日光迄は例幣使道と重複する。このためこの4宿を含む鴻巣～佐野間を「日光脇往還」と称する場合もある。

日光脇往還を通行した主な人々は、次の通りである。

- ◎徳川家康の遺骸の通行／元和3年（1617）3月28日駿河の久能山から日光へ改葬時
- ◎日光日の番衆（八王子の千人同心）の通行／承応2年（1653）～幕末迄約50人づつ半年交代
- ◎徳川御三家が将軍の日光社参時に通行／少なくとも徳川家光の寛永19年（1642）の社参時まで遡る

川俣宿は、古文書によれば、寛永20年（1643）頃には宿駅として成立していたものと推定される。また元禄元年（1688）には助郷村として12ヶ村が指定され、大名の通行時等の場合、この村々が応援の人馬を負担したことが知られている。

川俣渡船場は元和2年（1616）に、関東16渡津の1つに挙げられ、渡船者の嚴重な取締が行われるなど、江戸防衛のための拠点とされていた。また渡船場から富士が美しく見え、庶民からは「富士見の渡し」と称されていた。

川俣河岸は、江戸時代より廻米（年貢米）や材木の津出し（船による江戸への積出し）の拠点として機能し、弘化3年（1848）においては、館林領48ヶ村の内27ヶ村の年貢を扱っていたと記録さ

れている。

以上の様に江戸時代に繁栄を極めた川俣宿は、明治40年(1907)の鉄道の開通により、その役割を果たし、現在に到った。 明和町川俣宿保存研究会





## 川俣事件記念碑 碑文

川俣事件は足尾鉍毒問題の中で最も大きな事件である。

明治の中頃、渡良瀬川の上流足尾銅山から流出する鉍毒によって中下流域は農作物や魚類に甚大な被害を受けた。生活を脅かされた農民たちは銅山の鉍業停止や補請願（押出し）を執行したがその成果は少なかった。

1898（明治31）年9月大暴風雨による洪水は銅山の沈殿池が決壊し渡良瀬川流域の田畑は深刻な被害を受けた。耐えかねた被害民は足尾銅山の鉍業停止を求めて第三回東京押出しを執行した。

その数万余人。薄着姿の老人も見られたという。

時の栃木県選出代議士田中正造は、この報に接し、急ぎ上京途中の一行に会い、多くの犠牲者を出さないために総代を残して帰村するよう説得した。その演説は、被害民を動かし、警備の憲兵、警察官にも深い感銘を与えたという。

この後、田中正造は足尾鉍毒問題解決に献身し、議会の於いても再三再四政府を追求したが、政府の答弁は終始曖昧に終わった。

十九〇〇（明治33）年二月十三日足尾銅山の鉍業に関わる諸問題を解決するために、被害民たちは決死の覚悟で第4回の東京押出しを執行した。

前夜から邑楽郡渡瀬村（現館林市）の雲龍寺に集結した二千五百余名の被害民は翌朝九時頃大挙上京請願のために同寺を出発。途中警察官と小競り合いを演じながら正午頃佐貫村大佐貫（現明和町）に到着。

ここで馬舟各一隻を積んだ二台の大八車を先頭に利根川に向かったが、その手前同村川俣地区の上宿橋（現邑楽用水架橋）にさしかかったところで待ち受けた三百余名の警察隊に阻まれ、多くの犠牲者を出して四散した。これが川俣事件である。

この事件で負傷し、現場及び付近で捕縛された被害民十五名は、近くの真如院（お寺）に連行された（翌日以降の調査で総数数百名が逮捕され、うち五十一名が凶徒聚衆罪等で起訴された）。

この事態を重くみた佐貫村の塩谷村長をはじめ郡・村会議員区長らの有志は、村医を呼び負傷者に応急手当を施し、炊き出しを行い、にぎり飯を差し入れるなど被害民の救恤につとめた。この手厚い扱いに被害民関係者は深く感銘し、これを後世に伝えている。

この後、政府の措置に失望し田中正造は、衆議院議員を辞職し、天皇に鉍毒問題を直訴、以後谷中村遊水地化反対闘争へと戦いを続ける。

この地で川俣事件が発生してから百年が経過し、いま足尾鉍毒事件は公害の原点として新たな脚光を浴び、環境問題にも強く訴え続けている。

この史実を永遠に風化させないために、ここに川俣事件発生百年にあたり、記念碑を建立し、後世に伝えるものである。



明和町指定史跡 川俣事件衝突の地 平成十一年十二月二十八日指定

足尾銅山の鉱毒に苦しめられた渡良瀬川流域の農民は、明治三十三年二月十三日、鉱業停止を求め東京へ向かうが、その途中、この地（橋付近）で警察隊と衝突した。これが川俣事件である。当時の佐貫村村長や村民は、負傷した農民を真如院にて手厚く介護したということである。平成十二年二月 明和町教育委員会

川俣事件衝突の地碑がある小公園から街道を500m弱進んだ大佐貫南交差点があり、右（東）から県道368号線、一般道、国道122号線と3本の道路があり、街道は真ん中の一般道を進む。





街道を400m強進むと県道361号線との信号が無い交差点がある。(左方面は千代田町・大泉町へ。右折すると約1,000mで伊勢崎線川俣駅へ行く。)

交差点を左折、50m程の右奥に「東光寺」があり、その隣に「長良神社」があるので寄ってみる。  
(11:24~28)



中央・東光寺、右側の鳥居・長良神社

東光寺



東光寺

東光寺は、真言宗豊山派の寺院。長良神社とともに無住である。

ここは、鎌倉時代の大佐貫館跡があったと言われている。大佐貫館は、鎌倉時代に佐貫資綱によって築かれた。資綱の子嗣綱は現千代田町赤岩に赤岩城を築城して居城を移した。

長良神社





長良神社の祭神は藤原冬嗣の長男藤原長良。死後、春日大社の末社に列せられたのを、上野国赤い良遠が上野国佐貫荘長柄郷瀬戸井村上の森（邑楽郡千代田町）に社殿を造営し勸請したのが始まり。以後分社することが多かった。

長良神社参道入口から街道を250m程進むと右手に「阿弥陀三尊板碑標柱」がある。民家の裏手にあると聞いていたので、たまたま居られた家人の了解を得て拝見することが出来た。（11：32～36）



〔阿弥陀三尊板碑〕

# 此 花 丸

[梵字：阿弥陀如来]

[梵字：勢至菩薩]

[梵字：観音菩薩]

阿弥陀三尊板碑標柱から50mの左側に「石仏群」があり、その裏に「地藏堂」がある。



石仏群



地藏堂

すぐ先の十字路の東北角に「長良神社」の参道入口があり、両部鳥居と社殿がある。(何故か、この辺に長良神社が多い)(11:39~41)奥に根本山神社が祀られている。

*[注]* 両部鳥居とは、本体の鳥居の柱を支える形で稚児柱(稚児鳥居)があり、その笠木の上に屋根がある鳥居。名称にある両部とは、密教の金胎両部(金剛、胎藏)をいい、神仏習合を示す名残り。



長良神社の両部鳥居



長良神社社殿



長良神社境内の根本山神社

長良神社の先の用水路を渡った左に「富士山供養塔」がある。(11:44)



富士山供養塔は安政4年(1857)建立。富士講の一行から遅れて、ここで力尽き倒れた老人が、田圃の水面に映った富士を見て「富士山が見えた」と言って亡くなったそうだ。哀れんだ村人が供養塔を建てたという。

富士山供養塔から集落の中を250m程進むと十字路(左真横、斜め左、斜め右)に出る。旧街道は左右斜めの道の間を走っていたと思われる。



斜め道を進んで県道7号線に出、信号を渡った所にある「山田うどん」に入り、昼食をとる(11:49~12:23)

昼食後、県道を進み、明和町と館林市の境の谷田川をあおやぎ渡り、今の橋より下流にあった過去（旧街道）の橋の跡を見に行く。ビニールハウス端の小道を入り、河岸に出、直ぐ上流の橋脚跡を確認する。

（12：33）



〔県道7号線〕



〔青柳橋〕



〔谷田川〕



〔北から見た旧青柳橋跡〕



〔旧青柳橋橋脚〕

ビニールハウスの切れ目に戻ると左斜めに向かう道がある。これが旧道である。進むと県道7号線と交差する。信号が無い県道十字路を横切る。



〔旧青柳橋からの旧道〕



〔県道を渡った道〕



〔庚申塔〕

旧道は斜め右に行くのだが、旧道が消滅しているため直進し、150m程の十字路を右折し、250m程の十字路の右角に庚申塔があり、その先150m程進むと左に入る道があり、奥に「龍積寺」の山門が見えるので寄ってみる。（12：45～51）



〔龍積寺遠望〕



〔龍積寺入口〕



[本堂]

**龍積寺**（りゅうせきじ）〈トイレあり〉

当寺は、真言宗豊山派の寺院。この地は、永享年間（1429～41）に赤井勝元（赤井氏は鎌倉公方であった）によって青柳城が築かれた場所と言われている。赤井氏はその後文明年間（1469～86）に大袋城を築き、移った。

この頃、古河公方と関東管領上杉顯定方が争い、上杉顯定軍が古河公方の本拠・古河を攻めていて、この時に赤井氏の大袋城（立林）は落城したとされる。その後の弘治2年（1556）に赤井氏は大袋城の湖沼対岸に館林城を築城し、勢力を維持するが、永禄5年（1562）、上杉政虎（謙信）によって城を攻め落とされ、所領を失い没落した。（なお、青柳城は、龍積寺から北北西約400mの市立第三中学校周辺で、青柳長良神社が城の北端という説もある）

山門の左側に「麻疹地蔵」と呼ばれる地蔵尊が鎮座している。この地蔵尊は元々は「首切り地蔵」と呼ばれていた。近くの谷田川河畔に館林藩の刑場があり、そこにこの地蔵様があったが、明治後半に龍積寺に移されて、いつの間にか麻疹地蔵と呼ばれるようになった。



[麻疹地蔵]

[薬師観音堂]

龍積寺を出て街道を左折、250m弱の十字路を右折して県道に出る。県道を400m程進んだ茂林寺入口交差点を右折。(13:02)750m程で東武伊勢崎線の踏切を渡る。(茂林寺前駅は左の150m先)(13:16)



[茂林寺入口交差点]



[東武伊勢崎線踏切]



[茂林寺前駅遠望]

踏切から100m程の車道を渡った左側一本奥の道に神社や石仏がある。



[天満宮]



[馬頭観音]



[馬頭観音]



[根本山神社]



天満宮、馬頭観音石仏、根本山神社で、天満宮は小さな社、馬頭観音は路傍の石仏、根本山神社は住



参道を左折すると茂林寺の**総門（黒門）**があり、総門からの参道には両側に狸像（21体）が並ぶ。



総門（黒門）



山門（赤門）

参道の先に**山門（赤門）**がある。総門は応仁2年（1468）に建立。山門は元禄7年（1694）の建立。山門と本堂の間にベンチがある。



[本堂]

**本堂**には、本尊釈迦牟尼仏像が祀られている。応仁2年（1468）に建立、享保12年（1727）に改築。本堂の北側一室に分福茶釜が安置されている。





本堂

茂林寺（HPより）

茂林寺は曹洞宗の寺院。青龍山と号す。開山は大林正通。正通は美濃国土岐氏の出。正通は諸国行脚で、上野国に立ち寄った折、伊香保山麓で守鶴と出会う。この守鶴はのちに茂林寺に分福茶釜を持ち込んだ老僧。

応永三十三年（1426）、正通は守鶴を伴い、館林の地に來住し、小庵を結ぶ。応仁二年（1468）、青柳城主赤井正光（照光）は、正通に深く帰依し、自領地の内八万坪を寄進し、小庵を改めて堂宇を建立し、青龍山茂林寺と号した。正光は、自ら当山の開基大檀那となり、伽藍の維持に努めた。大永二年（1522）には、後柏原天皇から勅願寺の綸旨を賜った。寛永十九年（1642）には、三代将軍徳川家光より二十三石四斗余の朱印を下賜された。



[守鶴堂]



本堂の隣に「守鶴堂」がある。当堂には、当山開山の大林正通大和尚に随（したが）いこの地に来た守鶴和尚の像が安置され、当山鎮守大菩薩として祀られている。

守鶴和尚は、大林正通大和尚と共にこの地に小庵を結んで以来、歴代の住職に役僧として仕え、分福茶釜を当山にもたらしたと伝えられる。

### 分福茶釜（HPより）

開山大林正通に従って、伊香保から館林に来た守鶴は、代々の住職に仕えました。

元亀元年（1570）、七世月舟正初の代に茂林寺で千人法会が催された際、大勢の来客を賄う湯釜が必要となりました。その時、守鶴は一夜のうちに、どこからか一つの茶釜を持ってきて、茶堂に備えました。ところが、この茶釜は不思議なことにいくら茶を汲んでも尽きることがありませんでした。守鶴は、自らこの茶釜を、福を分け与える「紫金銅分福茶釜」と名付け、この茶釜の湯で喉を潤す者は、開運出世・寿命長久等、八つの功德に授かると言いました。

その後、守鶴は十世天南正青の代に、熟睡していて手足に毛が生え、尾が付いた貉（ムジナ・狸の説もある）の正体を現してしまいます。これ以上、当寺にはいられないと悟った守鶴は、名残を惜しみ、人々に源平屋島の合戦と釈迦の説法の二場面を再現して見せます。

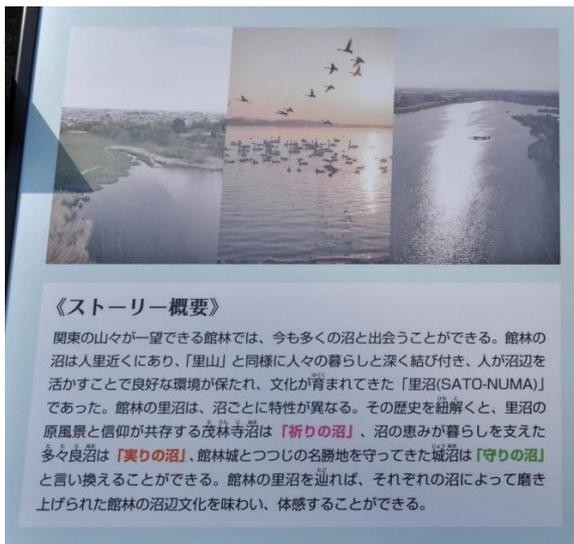
人々が感涙にむせぶ中、守鶴は貉の姿となり、飛び去りました。時は、天正十五年（1587）二月二十八日。守鶴が開山大林正通と小庵を結んでから百六十一年の月日が経っていました。

後にこの寺伝は、明治・大正期の作家・巖谷小波氏によって御伽噺「文福茶釜」として出版され、茶釜から顔や手足を出して綱渡りする狸の姿が、広く世に知られる事になりました。

13：36、茂林寺総門を出、左折した先に群馬県天然記念物「茂林寺沼及び低地湿原」の展望スポットがある。



茂林寺沼遊歩道を通して茂林寺前駅へ向かう。  
遊歩道入口に7枚の湿地解説板がある。



## 茂林寺沼と湿原の移り変わり

館林市は関東平野の北西部にあります。関東平野の地形は、「関東ローム」と呼ばれる火山灰の積もった「洪積台地」と、川の流れてつくられた「沖積低地」に大きく分けられています。茂林寺のある高台は洪積台地、沼や湿原は沖積低地に属し、高さ約2メートルちがいます。沼は、その高台を削って流れる川が、せき止められてできました。湿原の中央、茂林寺沼横近くの地下には、泥炭と呼ばれる黒い土が5メートル以上も積もっています。この層は湿原の植物が枯れて腐りながら長い年月をかけてできたものです。私たちはその層を調べることで沼や湿原の移り変わりを知ることができます。

● 館林市の地形

● 江戸時代末の茂林寺沼周辺

● この施設は館林市歴史資料館「125,000土壌断面館」の一部に併設したものです。

● この施設は館林市歴史資料館「125,000土壌断面館」の一部に併設したものです。

## 茂林寺沼・湿原・林の植物

茂林寺沼と沼の隣りにある湿原では、数多くの植物を見ることができます。群馬県の天然記念物に指定された昭和35年(1960年)には、数百種類の植物があったことが記録されています。その後の調査でイトハコベ・ノシラン・タカラカンレイ・ケナガボノシロフモコウなど新しく見つけた植物もありますが、沼を削した植物も少なくありません。植物は、沼や湿原の周りのような環境化により、姿を変えてきました。茂林寺の周りの林には高い場所、低い場所が生えています。湿原には、ハンノキやアカメヤナギなどの木々もありますが、イネ科やカタツムリ科の植物が数多く見られます。特に高さ2〜3メートルに成長するヨシとその下に生えるカササゲが一面に広がっています。

● 茂林寺の林の植物

● 湿原の植物

● 沼の植物

## 茂林寺沼周辺の鳥

茂林寺沼の周りでは、いろいろな鳥を四季を通して見ることができます。沼の周りには、カモ類・サギ類などの水辺の鳥が多く、昭和46年(1971年)に鳥獣保護区となつてからは、冬を越すカモ類も増えています。周辺の林にはキジなど山野の鳥も数多く住んでいます。

● 一年中同じ場所にいる鳥

● 夏鳥：春・夏に日本へ来る鳥

● 冬鳥：秋・冬に日本へ来る鳥

● 渡鳥：日本国内を季節により移動する鳥

● 大きさの比較

● 日本遺産 JAPAN HERITAGE

## 茂林寺沼の魚・昆虫など

魚は、コイやフナのほか、沼の底を好むドジョウ・ナマズなどを見ることができます。水の増える夏には、下流の谷田川から沼に入る魚も少なくないようです。両生類ではウシガエルが多く、夏には鳴き声が響きわたり、湿原にはこのウシガエルを食べるヘビ(ヤマカガシ)もいます。昆虫では、幼虫の時期を沼ですごすトンボが多く見られます。生きものは、茂林寺沼やその周りの自然の中で、お互いにかわりあひながら生きています。その中には私たち人間も含まれています。

● 大きさの比較

● 館林市教育委員会



[茂林寺沼及び低地湿原 群馬県指定天然記念物]



湿原を出て、住宅地を駅へ向かって歩む。



13時57分、茂林寺前駅に着き、14時00分の久喜行きに乗る。

今日は旧街道ならではの数多くの社寺や史跡を訪ねるウォークであった。